

# 美術館ニュース

## 平成22年度 展覧会スケジュール(9月～12月)

<b>特別展</b>	9月1日～9月12日	岡山県美術展覧会
	10月8日～11月7日	岡山・美の回廊
	11月18日～12月5日	日本伝統工芸展岡山展
	12月21日～1月30日	CULTEX 共通言語としてのテキスタイル 織る・編む・ひろがる テキスタイルの形と色
<b>岡山の美術</b>	11月12日～12月5日	日本伝統工芸展関連事業 もっと伝統工芸 青白磁 I氏賞展
	11月12日～12月5日	緑川洋一の写真「南仏を行く」
	11月12日～1月30日	生誕120年記念 稲葉春生展
	12月7日～1月30日	

### 美術の夕べ

<b>美術の夕べ</b>	9月24日(金)	岡山の美術をみる 岡本裕子(主任学芸員)
	10月22日(金)	岡山・美の回廊展をみる 守安 収(副館長)
	11月26日(金)	第57回 日本伝統工芸展をみる 福富 幸(学芸員)
	12月24日(金)	岡山の日本画と稲葉春生 中村麻里子(主任学芸員)

### 美術館講座

<b>美術館講座</b>	10月9日(土)	「祈りのかたち」「雪舟・武蔵・玉堂」 中田利枝子(主任学芸員)、守安 収(副館長)
	10月11日(月・祝)	「近代の岡山画壇」「近代の岡山工芸事情」 妹尾克己(学芸課長)、中村麻里子(主任学芸員)、 福富 幸(学芸員)
	10月23日(土)	「現代の多様な美の表現」 妹尾克己(学芸課長)、高嶋雄一郎(学芸員)
	11月13日(土) 12月11日(土)	「テーマ未定(I氏賞関連)」高嶋雄一郎(学芸員) 岡山の日本画と稲葉春生 中村麻里子(主任学芸員)

<b>記念シンポジウム</b>	10月16日(土)	I「岡山・美の回廊」 司会および基調講演：鍵岡正謹(館長) パネリスト：当館学芸員
	10月24日(日)	II「雪舟の画賛をめぐって」 基調講演：芳澤勝弘(花園大学国際禅学研究所教授) パネリスト：河合正朝(慶應義塾大学名誉教授)、 島尾 新(多摩美術大学教授)、 福島恒徳(花園大学教授)、 芳澤勝弘

### 編集後記

美術館ニュース90号をお届けします。暑い日が続き、体調を崩された方も多いのではないのでしょうか。斯く言う私もその一人です。美術館展示室の中の空調は、作品を守るため常に作品に最適な温度・湿度を保っています。そのため外気との温度差が開いてしまう暑い時期には、何か少し羽織るものをご用意していただくなど、よりお客様に快適な美術鑑賞をしていただければと思います。

[O.M.]

**美術館ニュース 第90号**  
発行：2010年9月  
発行者：岡山県立美術館  
〒700-0814 岡山市北区天神町8-48  
TEL：086-225-4800  
E-Mail kenbi@pref.okayama.lg.jp

## 「第25回国民文化祭・おかやま2010」協賛 特別展覧会「岡山・美の回廊」

会場／全館(2階第1会場、地下1階第2会場、地下ホワイエ、屋内広場、中庭)  
会期／2010年10月8日(金)～11月7日(日)  
開館時間／午前9時～午後5時(入館は閉館30分前まで)  
ただし10月8日(金)は午前10時開館  
10月22日(金)は午後7時まで開館  
休館日／10月25日(月)のみ

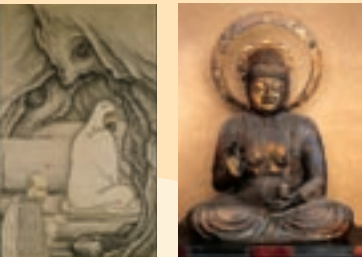
当館では今秋10月30日から11月7日までの間、岡山県下全域にわたって開催される「第25回国民文化祭・おかやま2010」に協賛し、平安時代から現代に至るまで、約1000年に及ぶ時間を横断して岡山ゆかりの美術を取り上げる特別展覧会「岡山・美の回廊」を開催いたします。

この展覧会では、岡山の文化を「歴史と地域をめぐる」「人と人をつなぐ」「未来へののびる」回廊として捉えています。出品作品はおよそ200件。国宝5件、重要文化財24件を含みます。

まずは岡山県を代表する平安・鎌倉時代の仏像・神像に始まり、墨筆を駆使して「書」をしたための寂室元光や良寛、「水墨画」を描いた雪舟や浦上玉堂へと続きます。そして欧米の文化との出会いによって劇的な変動を体験した洋画や日本画などの近代の美術を経て、現代の絵画・彫刻・工芸・書・写真、さらにそれらのジャンルを超えて制作されるインスタレーション等の多彩な表現に至るまで、滔々と流れる美術の世界を紹介します。それは出身者と来訪者によって脈々と培われてきた岡山の豊かな文化的土壌を再認識する絶好の機会であり、現在を知り、未来への展望をうかがうまたとない場となることに違いありません。

ちなみに本展は、全体を以下の8つの章に分けて構成しています。

- ①祈りのかたち ②墨の美と心 ③明治の油彩画
- ④近代の工芸 ⑤ひと ⑥風景と社会 ⑦くらしをゆたかに
- ⑧多様な美の表現



雪舟(慧可断臂図) (国宝) 青年寺  
薬師如来坐像 (重要文化財) 餘慶寺



原田直次郎(風景)



緑川洋一(灯台に戯れる)



伊勢崎 淳(吉備・橋架)

### 関連行事

- 記念シンポジウム 会場：美術館ホール(定員210名)先着順、無料  
1.「岡山・美の回廊」日時：10月16日(土) 13:30～16:00  
司会および基調講演：鍵岡正謹(当館館長) パネリスト：当館学芸員  
2.「雪舟の画賛をめぐって」日時：10月24日(日) 13:30～16:45  
基調講演：芳澤勝弘(花園大学国際禅学研究所教授)  
パネリスト：河合正朝(慶應義塾大学名誉教授)、島尾 新(多摩美術大学教授)、福島恒徳(花園大学教授)、芳澤勝弘  
共催：画賛研究会、花園大学国際禅学研究所
- 美術館講座 会場：講義室(定員70名)先着順、無料、各日13:30～15:30  
①「祈りのかたち」「雪舟・武蔵・玉堂」10月9日(土) 中田利枝子(主任学芸員)、守安 収(副館長)  
②「近代の岡山画壇」「近代の岡山工芸事情」10月11日(月・祝) 妹尾克己(学芸課長)、中村麻里子(主任学芸員)、福富 幸(学芸員)  
③「現代の多様な美の表現」10月23日(土) 妹尾克己、高嶋雄一郎(学芸員)
- 美術の夕べ 会場：2階展示室 要観覧料 日時：10月22日(金)18:00～18:45

<b>主な出品作品</b> (●国宝、○重要文化財)		
○木 造	薬師如来坐像(餘慶寺)	原田直次郎 風景(岡山県立美術館)
○木 造	隨身像(高野神社)	見島虎次郎 酒津の秋(大原美術館)
●雪舟	破墨山水図(東京国立博物館)	坂田 一男 キュビズムの人物像(岡山県立美術館)
●雪舟	慧可断臂図(青年寺)	国吉 康雄 ミスターエース(福武コレクション)
●雪舟	天橋立図(京都国立博物館)	竹久 夢二 秋の福(夢二郷土美術館)
○宮本 武蔵	枯木鳴鶴図(和泉市久保惣記念美術館) [10/26から展示]	小野 竹喬 海鳥(笠岡市立竹喬美術館)
○浦上 玉堂	東雲歸雪図(川端康成記念会)	平藤 田中 五浦釣人(岡山県立美術館)
○寂室 元光	寂室元光墨蹟遺傳(永源寺)	百人一首扇面貼付屏風(岡山県立美術館)
良寛	草堂書夜作(個人) [10/26から展示]	緑川 洋一 灯台に戯れる(緑川洋一記念室)
正阿弥勝義	百代職風彫形香炉(倉敷市立美術館)	高橋 秀 書(個人)
金重 陶庵	備前灯籠(個人)	伊勢崎 淳 吉備・橋架(個人)
松岡 寿	ビエトロミカの服装の男(岡山県立美術館)	

\*なお、一部作品については展示替えがあります。9月10日以降、館のホームページをご覧ください。



難波仁齋「描菫罨呼月卓」



**難波仁齋** 「描藪罨呼月卓」昭和四〇年（一九五五）作 縦三七〇×横六一〇×高一八cm

卓の中央に大きく黄金色の満月が浮かび、その周囲には萩や桔梗、女郎花、撫子などの秋草が咲きそろろう。しなやかで伸びのある筆描きには繊細な蒔絵が施され、華やかさの中に落ち着いた風情と品格が漂う。俗語に「武蔵野」の情景だろうか。「武蔵野」は古くから詩歌や古画にも取り上げられ、日本人の美意識を表すモチーフとして大愛好された。難波仁齋（一九〇三—一九七六）は岡山県を代表する漆芸家で、永く岡山工芸学校（現

県立岡山工業高等学校、岡山大学教育学部特設美術科で教鞭をとった。戦前から帝展や日展、日本伝統工芸展などに出品し、入選、入賞を重ねた。昭和三九年（一九六四）、色漆による筆描き装飾技法「描藪罨」の技術で、岡山県重要無形文化財保持者に指定された。本作は、その翌年、第一回日本伝統工芸展に出品されたもので、仁齋の代表作にあげられる。

【学芸員 福富 幸】

### 岡山県アクセシビリティ研修会に参加して

平成22年8月6日金曜日、三光荘アトリウムホールで行われた、岡山県アクセシビリティ研修会に参加して来ました。皆さんはアクセシビリティというものをご存じでしょうか。

直訳すると Access(接近する)+able(できる)=形容詞 Accessible(接近できる)を名詞化した Accessibility「接近できること」「近づきやすさ」といった意味です。

この研修会ではウェブアクセシビリティの重要性についての講義が行われ、そのアクセシビリティを確保するための実装例を紹介していただきました。ウェブアクセシビリティと言うのはウェブ上の情報にアクセスできるか、情報を入手しやすいかどうか、つまり、身体的特性や機器の違いに関わらず、アクセスできる環境を整えることを定めたものです。

当館では、今年の6月末までに美術館ホームページ内の、整備されていなかった全てのウェブページのアクセシビリティの向上を図りました。普段目にされているホームページからは、今までとどこが変わったのか、見た目上で気付いた方は少ないかと思ひます。それは、ウェブページの表面上だけではなく、主に内面の修復を行った為です。

視覚障害者の方がウェブを使う際には、合成音声読み上げソフトを使用する場合があります。そのソフトは文字を読み上げるため、画像の代替テキスト(通常は見えない画像の説明になるもの)の抜け落ちているところの記入をしたり、ウェブページの構造を正したり、全ての画面表記を読みやすいように修正(13:30→13時30分など)を施して行きました。しかし、研修の中で実際に全盲の方のホームページの利用紹介ビデオを見ると、当館のサイトは改善出来る部分がまだまだある、と実感しました。作り側として、見た目と使いやすさとのバランスを取るのは容易な事ではありません。ですが、これからも利用者への配慮と思ひは常に心に留めて、制作をしていくつもりです。どなたでも同じ様にサイト利用していただける、そんなホームページに少しでも近づけていくよう、日々努力していきたいと思ひました。

【学芸員 尾崎 碧】

### \*\*\*\*\*ニューフェイス紹介\*\*\*\*\*



はじめまして、高嶋雄一郎と申します。東京と金沢の美術館に勤務した後6月からこちらに参りましたが、学芸員としては7年目で、まだまだ駆け出しになります。

学生時代は1960-70年代のアメリカ美術(インスタレーションなど)に特に関心がありまして、近年は20世紀全般の写真やアーティスト・ブックに興味を広げています。今世紀初頭の写真には、記録と美術のはざまを揺れ動くその萌芽に多彩な魅力が感じられますし、アーティスト・ブックにおいては、挿図は勿論、レイアウトや文字組に至るまで作家の美意識が貫かれており、展覧会のような実空間では実現し得ないその完成度に強く惹かれています。これまでは、20世紀以降の美術や写真の展覧会を中心に担当してきました、また、教育普及に関心の高い美術館におりましたので、普及事業も積極的に企画しました。

岡山という文化と自然の双方において恵まれた地域は、過去に数多の興味深い作家と作品を輩出してきましたし、今なお未知の表現が続々と現れては、世界へ羽ばたこうとしています。温故知新、当館において私も歴史的な文化財に触れつつ、新しい時代の美術においては自らの研究と見聞をいっそう広め、来館者の方々にそうした多彩な美術に接する機会を美術館において設けていくことが出来れば、と願っております。どうぞ宜しくお願いいたします。

【学芸員 高嶋雄一郎】

## 2010年夏 ワークショップ レポート

当館では、美術館に親しみ、作品や美術に対する理解が深まるよう“つくる”に関わるプログラムや“みる”に関わるプログラムを随時企画している。来館者が参加しやすく、そして興味関心のある切り口から、作品や美術、そして人やことに**出会うきっかけづくり**を提供することが、美術館におけるワークショップの目的と考えている。切り口をできるだけ多く提供するために、今年の夏は、「アートと仲よくなるためのワークショップ」として以下のプログラムを実施した。

●切り口1 「来館者の都合に合わせて随時エントリー」  
来館者が随時エントリーすることができる“みる”ためのワークショップとして「県美'10夏休み子どもワークシート」実施した。ステップアップしながら“みる”切り口を岡山的美術展(常設展)で体感し、特別展も“みる”というワークシートである。これは当館のボランティアスタッフのインタラクティブな関わりがあってこそ出来るワークショップである。

●切り口2 「学校との連携」  
小中学校の先生たちと協働で、本物と児童生徒が出会うための“みる”ワークショップ「小学生鑑賞教室」、「中学生鑑賞教室」【写真】を実施した。それぞれ、岡山県小学校教育研究会岡山支部図画工作部会、岡山県中学校教育研究会美術部会と共催し、多くの現場の先生方と当館のボランティアスタッフが協働で企画運営、当日のナビゲートを行った。児童生徒は、本物の作品と出会うと同時にナビゲートスタッフ(人)との出会いという貴重な体験をすることが出来た。

●切り口3 「アーティストとの出会い」  
本物との出会いは作品に限ったことではない。作品の作り手であるアーティストとの出会いも本物との出会いの一つである。そこで、参加者がアーティストと出会い一緒に作品を“つくる”ワークショップ「木版画～刷ることを楽しもう～」(講師:関崎哲氏 岡山県立大学准教授)【写真2】、そして、アーティストと一緒につくった自分の作品がアーティストの作品と出会うワークショップ「黄色プロジェクト～カモフラージュイエロー～」(講師:野田涼美氏 テキスタイルアーティスト)【写真3】を実施した。

「木版画～刷ることを楽しもう～」では、木版画本来の**ばれんで刷る**ことを参加者は楽しみ、刷りの奥深さを体感することができた。また、「黄色プロジェクト～カモフラージュイエロー～」では、黄色のものをリサイクルして作品をつくり、さらにその作品がアーティストの作品とコラボして展示される。参加者は、**自分の作品とアーティストの作品の出会い**を楽しみに待っている。時間を経て、人の手を経て、自分の作品がどのように生まれ変わるのかワクワクしながら待っている。

今年の夏は、アーティスト、学校現場の先生、ボランティアスタッフ、そして展示担当学芸員等々、多くの「人」の協力によって、多様な切り口でワークショップを開催することができた。参加者は、**作品や美術、そして人やことに出会う**ことを通して、美術館に親しみ、作品や美術に対しての理解を深めることができたのではないかと**思っている**。 【主任学芸員 岡本裕子】

- 「県美'10夏休み子どもワークシート」  
対象:小中学生(幼児~大人も参加可能)  
開催期間:夏休み期間中随時エントリー可  
スタッフ:県美ボランティアスタッフ  
参加者数:約750人
- 「小学生鑑賞教室~10 美術館へGO!!~」  
対象:岡山市内小学校5・6年生  
開催日時:8月4日(水)午前・午後  
スタッフ:岡山市内小学校教員  
VTPスタッフ、対話型鑑賞体験ツアースタッフ  
参加者数:61人
- 「中学生鑑賞教室~10 美術館へGO!!~」  
対象:中学生  
開催日時:8月6日(金)午前・8日(日)午後
- スタッフ:岡山県内中学校教員  
VTPスタッフ、対話型鑑賞体験ツアースタッフ  
参加者数:62人
- 「黄色プロジェクト~カモフラージュイエロー~」  
対象:小学生以上  
開催日時:8月14日(土)午前・午後  
講師:野田涼美氏(テキスタイルアーティスト)  
参加者数:31人
- 「木版画～刷ることを楽しもう～」  
対象:小学校4年生以上  
開催日時:8月21日(土)午後  
講師:関崎哲氏(岡山県立大学准教授)  
参加者数:17人



【写真1】中学生鑑賞教室



【写真2】木版画



【写真3】黄色プロジェクト

### 第57回日本伝統工芸展岡山展

会期 11月18日(木)~12月5日(日)

地下展示室にて

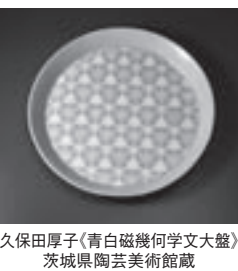
日本伝統工芸展は、「伝統工芸」という名前はついていますが、今を生きる作家たちの新作が展示される「現代工芸」の展覧会です。今年、57回目となる半世紀以上の歴史をもつ工芸部門では最大規模の公募展で、全国12会場を巡回しています。

日本には、古くから世界に誇る優れた工芸技術があり、数多くの作品が作られてきました。時代ごとに、技術の革新や新しい素材、意匠の流行などを取り入れ、変化しながら今日に繋がっています。古くさいもの、とは思わず、作家たちの創意工夫を汲み取っていただきたいと思ひます。

岡山会場では、伝統工芸に親しんでいただくためのさまざまな関連事業を行っています。特別展示は、部門ごと作家を選抜し、作家の過去から現在までの作品の変遷、制作工程などを紹介する企画展です。各作家の制作には、作家独自の秘密や秘訣もありますが、作品ができあがるまでの苦心や過程、創作への情熱を感じてほしいと思ひます。

4回目となる今年も、陶芸の前田昭博さんと久保田厚子さんを取り上げます。前田さんと久保田さんは、ともに、磁器の産地ではない鳥取と岡山で、永年、白磁と青白磁の制作に取り組んでこられました。前田さんは、主に、半透明のほの明り白く柔らかない姿をした壺や鉢を制作。光と陰によって静かに変化する形を見つめています。久保田さんは、主に、青白磁の大皿に、凹凸で草花文や幾何学文をデザインした作品を制作。釉薬の濃淡で表現できるデザインの可能性を追求しています。

かつて、中国や韓国からもたらされた白磁や青白磁は、日本において「神品」と呼ばれるほど珍重され、国内に優れた作品が遺っています。それらは多くの人々を魅了し続け、多くの作家がこの技法に取り組んできました。その伝統をふまえ、独自の白磁、青白磁を創り上げようとしているお二人の美しい**技と美の出会い**をぜひお楽しみください。



前田昭博(白瓷面取壺) 東京国立近代美術館蔵

特別展示 「白磁・青白磁」前田昭博&久保田厚子

会期 11月12日(金)~12月5日(日)

2F展示室にて

## パスキンとエコール・ド・パリ展を振り返って

### パスキンの「国吉夫人」と国吉康雄の「もの思う女」

この展覧会は当初は「パスキン展」ということで企画がなされた。昨年宇都宮美術館で開催されたパスキン展とほぼ同じものを岡山で開催するという趣向であったが、北海道立近代美術館のご好意でエコール・ド・パリの画家達の作品も、それもほぼ全てお借りする事が出来、充実した展覧会となった。そこに当館の特色として、パスキンと深い付き合いのあった国吉康雄の作品の一つのセクションを作って並べ、国吉がパスキンの作品をどう受け止めたか、さらに独自の女性像を形成していった過程を検証してみようと思ひた。

二人が親しい友人同士であったことはよく知られているのだが、彼らの交友の実際を示す資料はなかなか見当たらず、カタログの「パスキンと国吉」と題する文章は書きあがったものである。それで、パスキンと国吉を作品の上で比較することで、なんとか手掛かりを掴もうとした。パスキンのキャサリン・シュミットを描いた「国吉夫人」(1927年)を見て、ポーズが「もの思う女」(1935年)と似ていることに気が付き、この二点を並べて陳列した。右手を頭の後ろに回して腋を見せているのが共通している。国吉には腋見せポーズの女性像は「化粧」や「横たわる女」でも見られるが、「もの思う女」のポーズはおそらくパスキンのこの作品に由来するものではないかと考えた。パスキンは、アメリカ国籍を維持するために1927年にアメリカに戻った時にこの作品を描いており、国吉はよく知っていたはずである。キャサリンの左手は椅子の手載せに所在なげに置かれているが、国吉の「もの思う女」では頬に当てられ「メランコリー」のポーズとなり、国吉独自の女性像へと繋がっている。1930年代には国吉は自身の不安や懸念、憂いを女性像に投影して描くようになるのである。パスキンにはこの手を頭にもってきて腋を見せるポーズはいくつかあるが、西洋絵画では特にアングルやドラクロワ、アカデミズムの東方趣味の画家たちに好んで取り上げられているポーズである。女性の身体の線を強調するポーズでもあるのだろう。絵画の中の女性の腋見せポーズの歴史を探ると面白そうである。 【学芸課長 妹尾克己】



ジュール・パスキン (国吉夫人)



国吉康雄 (もの思う女)